（２）眼科定点把握対象疾患に関する動向

鹿児島県感染症発生動向調査企画委員会委員
鹿児島大学大学院医歯学総合研究科先進治療学専攻
感覚器病学講座眼科学分野
准教授　中尾　久美子

平成 29 年 1 月から 12 月に報告された眼感染症患者報告数は 438 人（男性 232 人，女性 206 人）で，平成 28 年に比べて 79 人減少し，定点あたり 62.6 人であった。前年より減少したものの，過去 10 年間の平均（定点あたり患者報告数 52.1 人）を上回っていた。

1）急性出血性結膜炎

平成 29 年の鹿児島県の急性出血性結膜炎の患者報告数は 2 人，定点当たり 0.29 人であった。全国的には平成 29 年の定点当たり患者報告数は 1.63 人で前年の 2.8 倍であったが，鹿児島県での発生は例年同様少なく，鹿児島県の定点あたり患者報告数は全国平均の 5 分の1以下であった。

2）流行性角結膜炎

平成 29 年の鹿児島県における流行性角結膜炎の患者報告数は 436 人，定点当たり 62.3 人であった。平成 29 年は前年の 0.84 倍に減少して，平成 10 年以降にみられる1年ごとに患者報告数が増減を繰り返すパターンを示した。全国的には平成 29 年の定点当たり患者報告数は前年とほぼかわらない 38.4 人で，鹿児島県の定点当たりの患者報告数は全国平均の 1.6 倍であった。月別の発生件数をみると，鹿児島県では 5 月と 9 月に小さなピークがあった。全国的には 7 月にピークがあり，全国と鹿児島県のピークにはずれがみられた。年齢別の発生をみるとすべての年齢層に発生していたが，10 歳未満(34.2%)が最も多く，次いで 30 歳代(17.9%)で，前年とほぼ同じ年齢分布であった。眼科定点は鹿児島市(4定点)，川薩（1定点），姶良（1定点），鹿屋（1定点）しかないため地域による発生の違いを判断することはできないが，この4地域のうちでは例年と同様に川薩の定点当たり患者報告数が多く，他の地域の 1.4～2.0 倍であった。

21)急性出血性結膜炎

（定義） エンテロウイルス70型及びコクサッキーウイルスA24変異型の感染によって起こる急性結膜炎である。

平成29年の急性出血性結膜炎は，眼科定点医療機関からの2人の報告があった。平成28年は報告がなかった。鹿児島市保健所からの報告であった。全国においても，大きな流行は認められなかった(図2-21-1, 図2-21-2, 図2-21-4)。

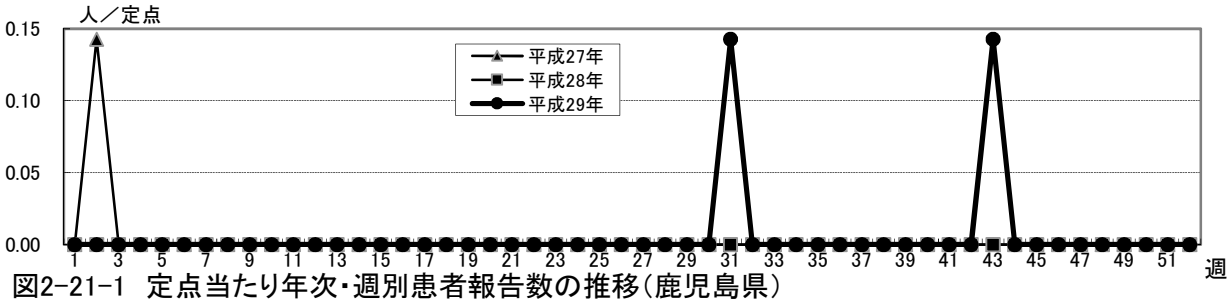

図2-21-1 定点当たり年次・週別患者報告数の推移(鹿児島県)

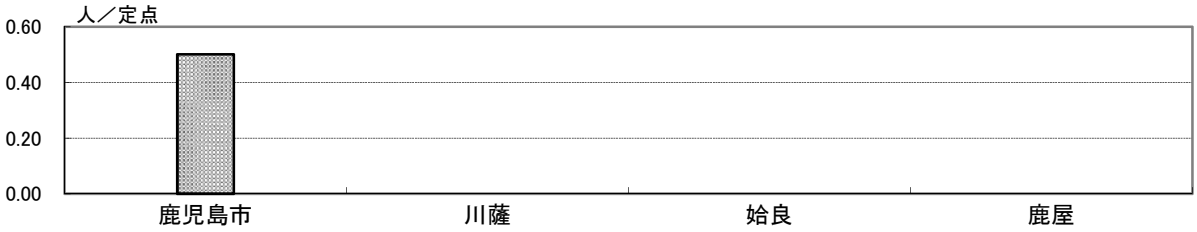

図2-21-2 定点当たり報告数(平成29年保健所別)

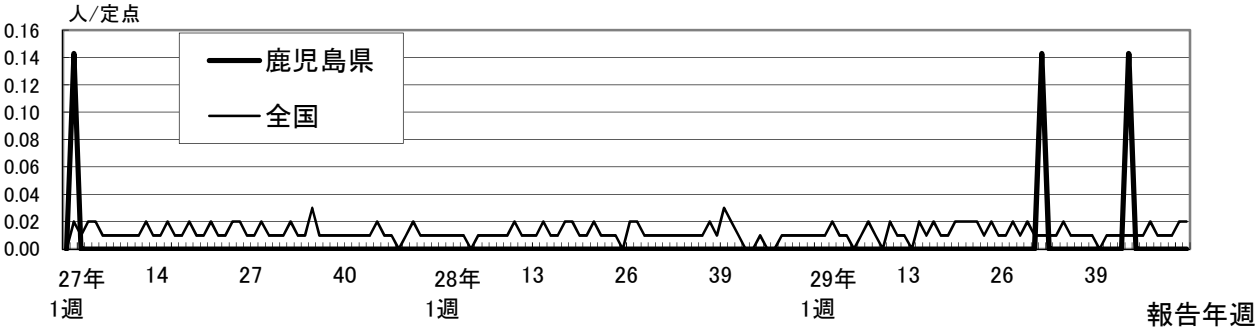

図 2-21-3 定点当たり報告数の推移(鹿児島県，全国)

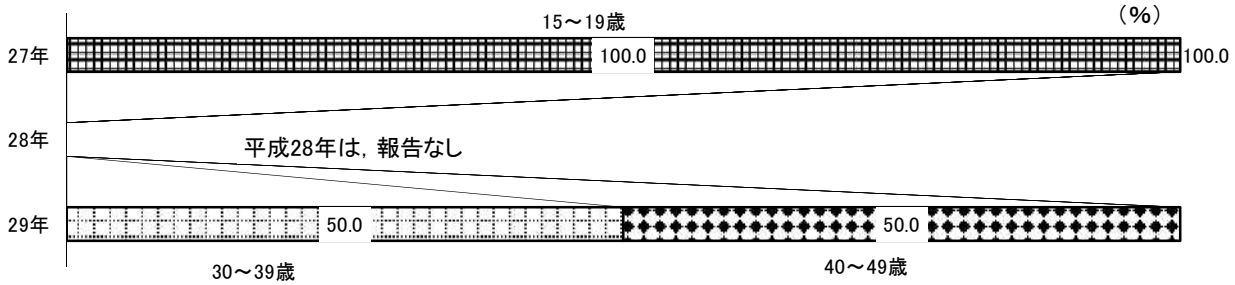

図2-21-4 年齢区分別患者発生状況(鹿児島県)

22)流行性角結膜炎

（定義） アデノウイルス8，19，37，4型などによる眼感染症である。

平成29年の流行性角結膜炎は，眼科定点医療機関から436人(累積定点当たり報告数62.29)の報告があり，平成28年(517人)より81人少なかった。第19週(4.43)にピークが認められた(図2-22-1)。全国と比較すると1年を通して高く推移した(図2-22-3)。保健所別では，川薩，鹿児島市，姶良の順に報告が多く(図2-22-2)，年齢別では，30～39歳(17.9%)，20～29歳(11.7%)，40～49歳(10.8%)の順に報告が多かった(図2-22-4)。

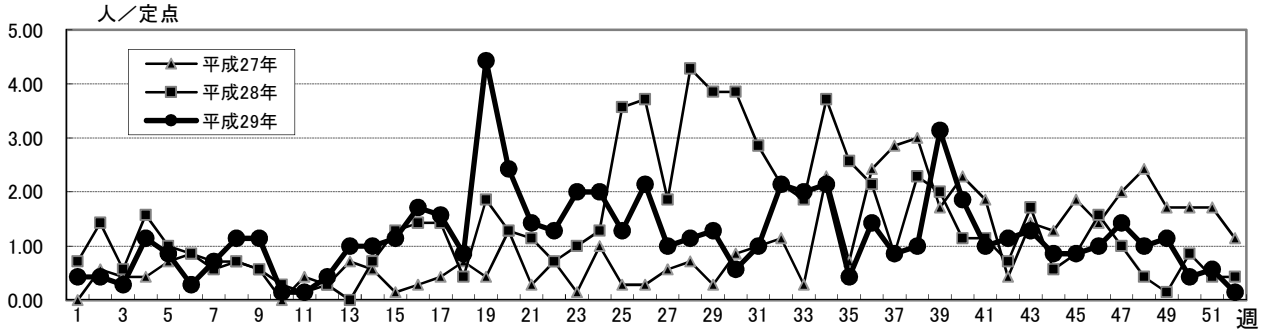

図2-22-1 定点当たり年次・週別患者報告数の推移(鹿児島県)

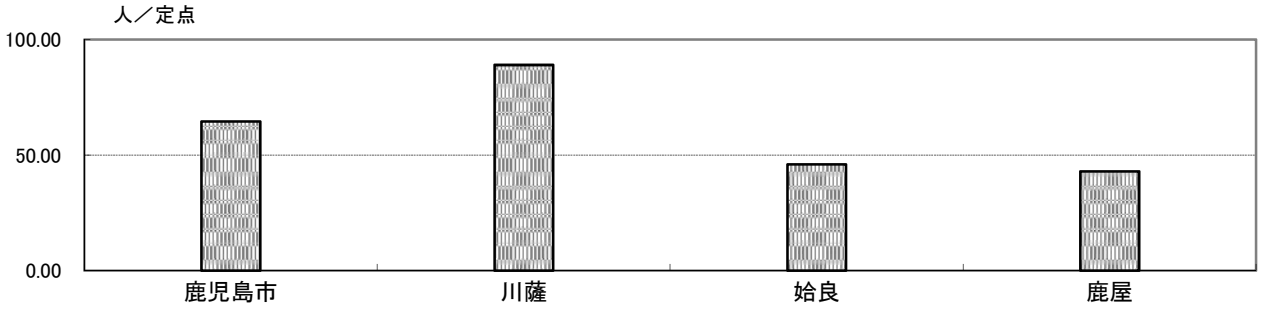

図2-22-2 定点当たり報告数(平成29年保健所別)

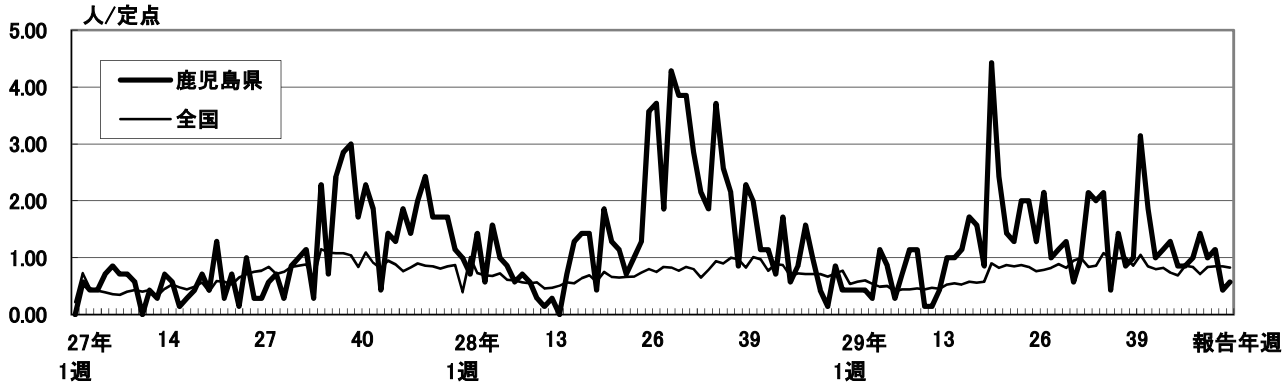

図2-22-3 定点当たり患者報告数の推移(鹿児島県，全国)

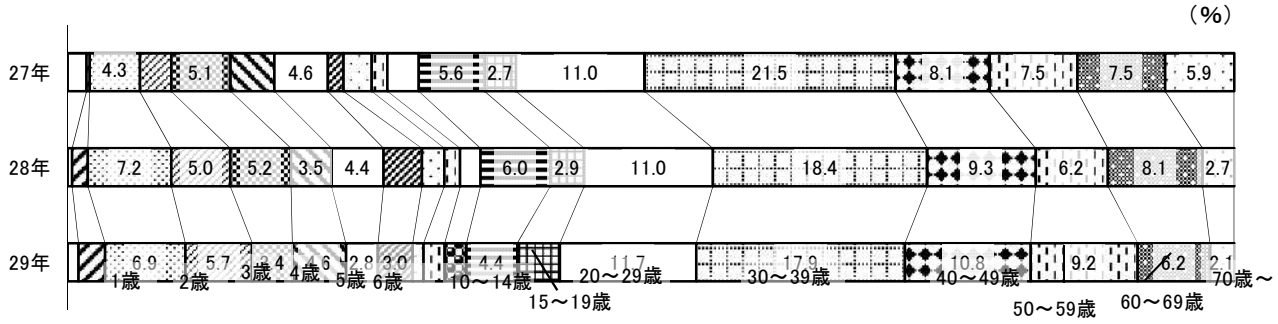

図2-22-4 年齢区分別患者発生状況(鹿児島県)

（３）性感染症定点把握対象疾患に関する動向

鹿児島県感染症発生動向調査企画委員会委員
鹿児島大学医学部･歯学部付属病院血液浄化療法部
准教授　速見浩士

平成 29 年 1 月から 12 月における鹿児島県内 16 定点からの性感染症 4 疾患の患者報告数は，(1)　性器クラミジア感染症 517 人，(2)　性器ヘルペスウイルス感染症 119 人，(3)　尖圭コンジローマ 51 人，(4)　淋菌感染症 273 人であった。報告数の合計は 960 人であり，平成 27 年の報告数 757 人から 203 人(26.8%)増加し，平成 28 年の報告数 775 人から 185 人(23.8%)増加した。疾患別の増減では，性器クラミジア感染症，性器ヘルペスウイルス感染症，および淋菌感染症において報告数が増加しており，特に淋菌感染症は 35.1%と最も大きく増加した。昨年よりも患者数が減少した疾患はみられなかった。

(1)　性器クラミジア感染症は Chlamydia trachomatis が原因微生物の性感染症であり，男性では尿道炎，精巣上体炎を，女性では子宮頚管炎，骨盤腹膜炎などを発症する。平成 29 年の患者数は，平成 28 年の 4171 人から 100 人(24%)増加し 517 人であった。月別の報告数は平成 27 年，平成 28 年と比較するといずれの年も 2 月と 11 月を除いた 10 カ月で報告数が増加していた。保健所別報告数では，姶良，鹿児島市，川薩の順に多く，全体の約 78%を占めた。年齢層別には，20～24 歳(23%)，25～29 歳，30～34 歳の順に多く，これらの 3 年齢層で全体の約 58%を占めた。また 30～39 歳の比率が減少し，15～19 歳と 20～24 歳の減少傾向は続いたが，25～29 歳では比率が増加した。また，15～24 歳の性器クラミジア感染症患者数 153 名は性感染症 4 疾患全体の約 16%であり，同年代男女比は 1.1：1 で男性の比率が高かった。

(2)　性器ヘルペスウイルス感染症は，単純ヘルペスウイルス（herpes simplex virus: HSV，HSV１型又は 2 型)の感染症により発症する。平成 29 年は 119 人が報告され，平成 28 年の 106 人から 13 人(12.3%)増加した。月別の報告数は平成 27 年と比較して 1～3 月，5～7 月，9 月の 7 カ月で報告数が増加し，平成 28 年と比較すると 1～7 月の 7 カ月で報告数が増加していた。保健所別報告数では，鹿児島市が 83 件と最も多く，全体の約 70%を占めた。年齢層別には，30～34 歳，25～29 歳(それぞれ 16.0%，15.1%)の順に多くみられた。前年と比較した場合，20～24 歳の比率が 18%から 10%へ減少したことと,45～49 歳の比率が約 4 倍に増加したことが特徴的であった。10～14 歳の男性に 1 名，15～19 歳の女性に 3 名の患者がみられた。

(3)　尖圭コンジローマは，ヒトパピローマウイルス（ヒト乳頭腫ウイルス：HPV）の感染により，性器周辺に生じる有疣状腫瘍である。平成 29 年の患者数は 51 人であり，平成 28 年の 50 人より 1 人(2%)増加し，性感染症 4 疾患の中で最も増加率が低かった。月別の報告数は，平成 27 年と比較すると 3 月，8 月，11 月を除く 9 カ月で報告数が増加し，平成 28 年に比べると 1 月，3 月～5 月，8 月，11 月をの 6 カ月で報告数の増加がみられた。保健所別報告数では姶良，鹿児島市，川薩の順に多く，全体の約 76%を占めた。患者年齢層別では 25～29 歳，30～34 歳，35 歳～39 歳の順に多く，30～39 歳が 31.4%を占めた。また平成 28 年と比較して，30～39 歳および 50 歳～64 歳での比率が増加したことが特徴的であった。

(4)　淋菌感染症は Neisseria gonorrhoeae による性感染症であり，男性では尿道炎，精巣上体炎を，女性では子宮頚管炎や骨盤腹膜炎を発症する。平成 29 年の淋菌感染症の患者数は 273 人であり，平成 28 年の 202 人から 71 人(35%)増加した。月別の報告数をみると以前からみられていた

夏季に限って多い傾向は認められず，1 月が最も報告数が多かった。また月別の報告数は平成 27 年，平成 28 年と比較するといずれの年も 1 月～3 月，6 月，7 月，9 月，10 月で報告数が増加していた。保健所別報告数では，姶良，鹿児島市，川薩の順に多く全体の約 93%を占め，姶良からの報告は全体の 63%であった。年齢層別には，20 歳台にピークがあり，20 歳～29 歳の年齢層が全体の 43%を占めた。また，平成 28 年と比較して，15 歳～19 歳の比率が 3.5%から 5.1%へと上昇し，30 歳～39 歳の比率が 36.1%から 28.2%へと低下した。女性患者が 53 人で約 19%であり前年と同様に低率であった。

平成 29 年の性感染症発生動向の特徴は，平成 28 年と比較して尖圭コンジローマを除いた 3 疾患において報告数が増加したこと，4 疾患全てにおいて 20 歳～29 歳の比率が 30 歳～39 歳の比率と比べて同等または高かったこと，淋菌感染症において前年と同様に女性の比率が約 20%であったことであった。また性器クラミジア感染症を除いた 3 疾患での 10 歳代における患者発生比率が増加していた点については，性感染症のさらなる低年齢化の兆候を示唆する所見として厳重な監視が必要である。また性器ヘルペスウイルス感染症を除いた 3 疾患で姶良保健所からの報告数が最も多かったことが地域的な特徴であった。

鹿児島県の性感染症発生状況の年次推移と疾患別男女比

平成 11 年から 29 年の 4 性感染症の 1 定点あたり報告数の年次推移を見ると，平成 29 年は 60.1 であり，平成 28 年と比べ増加し 4 年連続の増加であった（図１）。男女比は 2.4：1 と男性の比率が増加傾向であり，過去 8 年間で最も男性の比率が高かった。性器クラミジア感染症と淋菌感染症の男女比はそれぞれ 2.2：1，4.2：1 であった（図 2）。一昨年までは性器クラミジア感染症の男女比が等しいことが鹿児島県の特徴であったが，本年も男性患者数が女性患者数を上回り，女性患者が多いとする厚生科学研究班の全国サーベイランス報告や全国総数の男女比とは異なった結果であった。性感染症 4 疾患全体において男性の患者数および比率に増加傾向がみられることについては，本県の性感染症の動向として今後も監視が必要である。

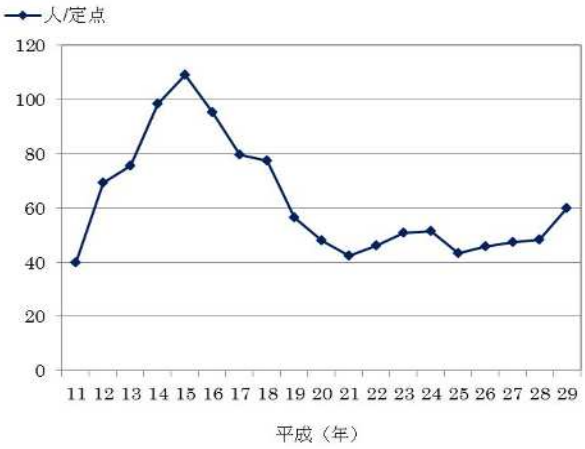

図１ 性感染症の年次別定点当たりの報告数

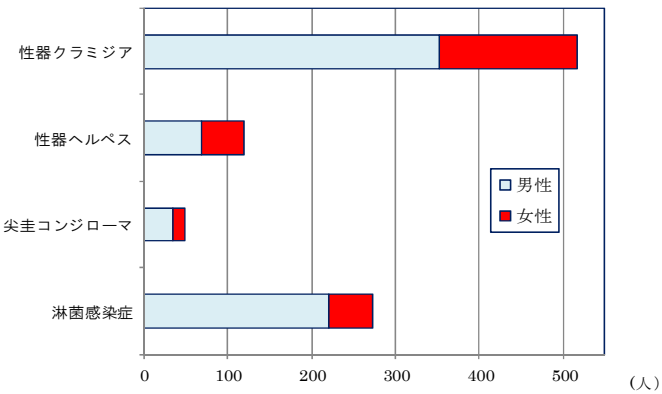

図２ 平成 29 年の性感染症の疾病別男女別報告数（鹿児島県）

23)性器クラミジア感染症

（定義）　*Chlamydia trachomatis* による性感染症である。

平成29年の性器クラミジア感染症の報告数は517人(累積定点当たり報告数32.31)で，平成28年(417人)より100人多かった。月別報告数では，10月(53人)が最も多く(図2-23-1)，全国と比較すると，2月と11月を除き，全国の定点当たり報告数を上回った(図2-23-2)。年齢別では，20～24歳(23.0%)，25～29歳(19.9%)，30～34歳(15.3%)の順に多かった(図2-23-3)。

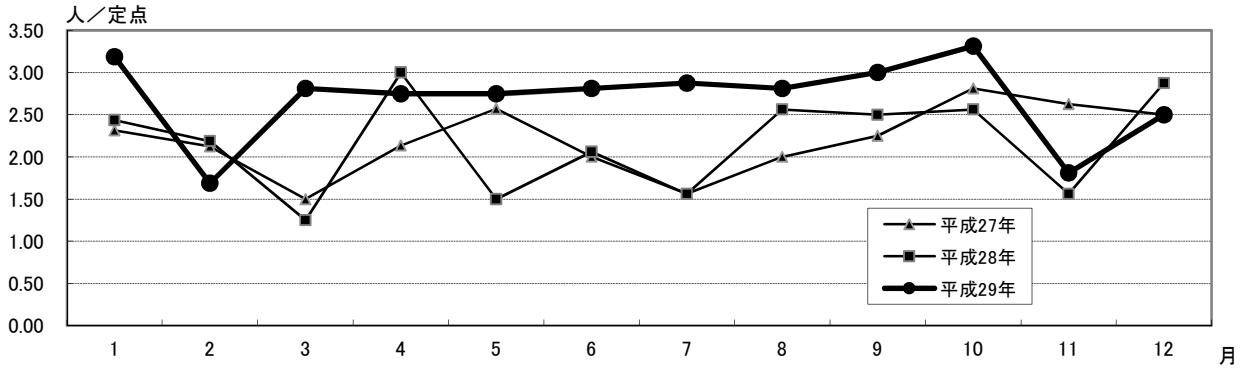

図2-23-1　年次・月別定点当たり報告数の推移(鹿児島県)

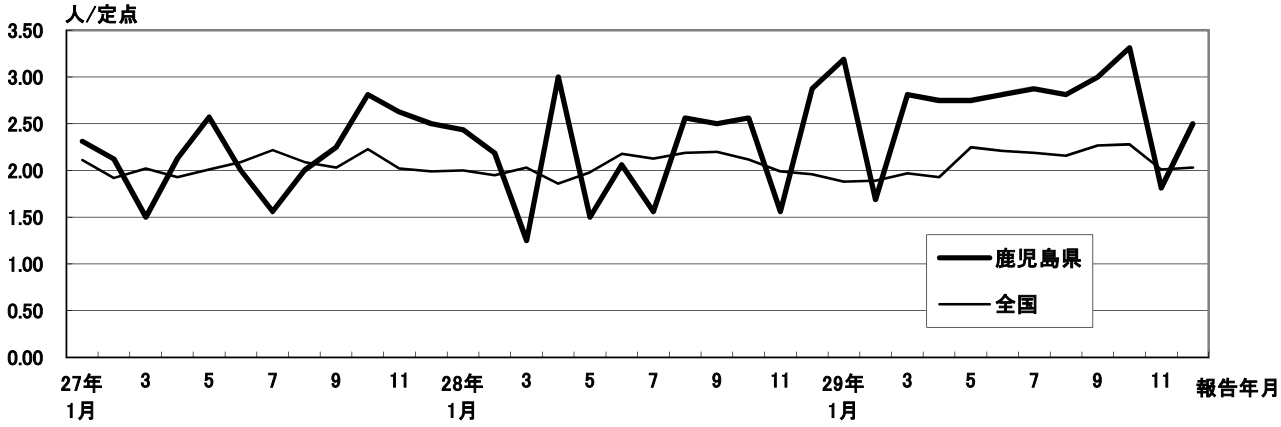

図2-23-2　定点当たり報告数の推移(鹿児島県，全国)

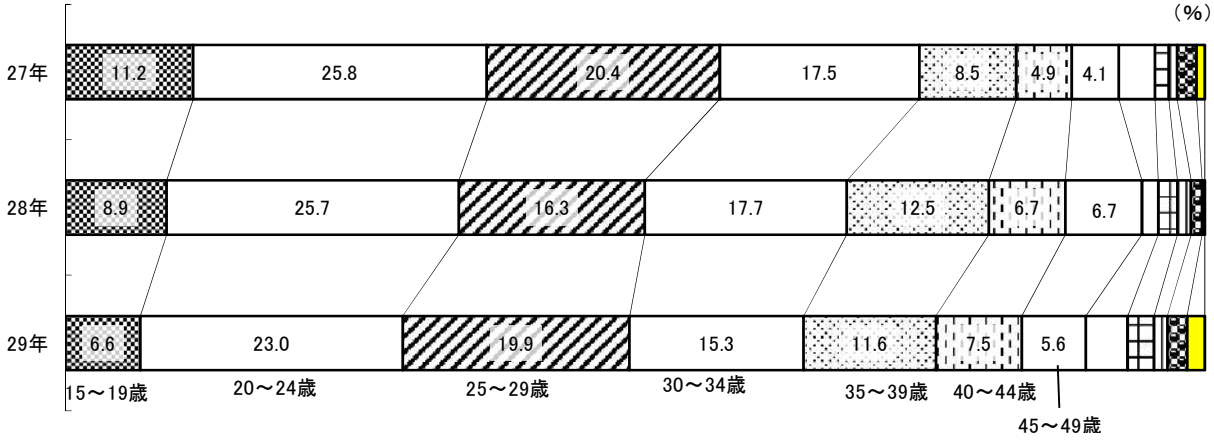

図2-23-3　年齢区分別患者発生状況(鹿児島県)

24)性器ヘルペスウイルス感染症

（定義）　単純ヘルペスウイルス（herpes simplex virus:HSV, HSV1型又は2型）が感染し，性器またはその付近に発症したものを性器ヘルペスという。

平成29年の性器ヘルペスウイルス感染症の報告数は119人（累積定点当たり報告数7.44）で，平成28年（106人）より13人多かった。月別報告数では，2月（13人）が最も多かった（図2-24-1）。全国と比較すると，2月，7月が全国より高値であったが，年間を通して全国よりも少ない状況で推移した（図2-24-2）。年齢別では，30～34歳（16.0%），25～29歳（15.1%），45～49歳（11.8%）の順に多かった（図2-24-3）。

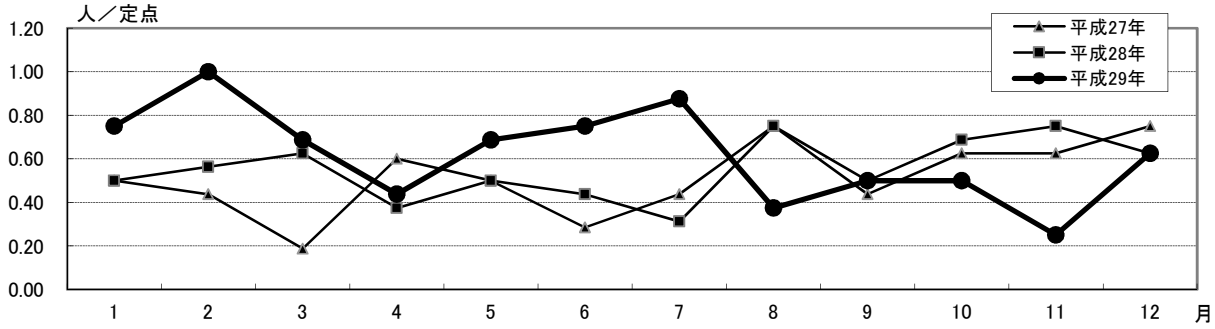

図2-24-1　年次・月別定点当たり報告数の推移（鹿児島県）

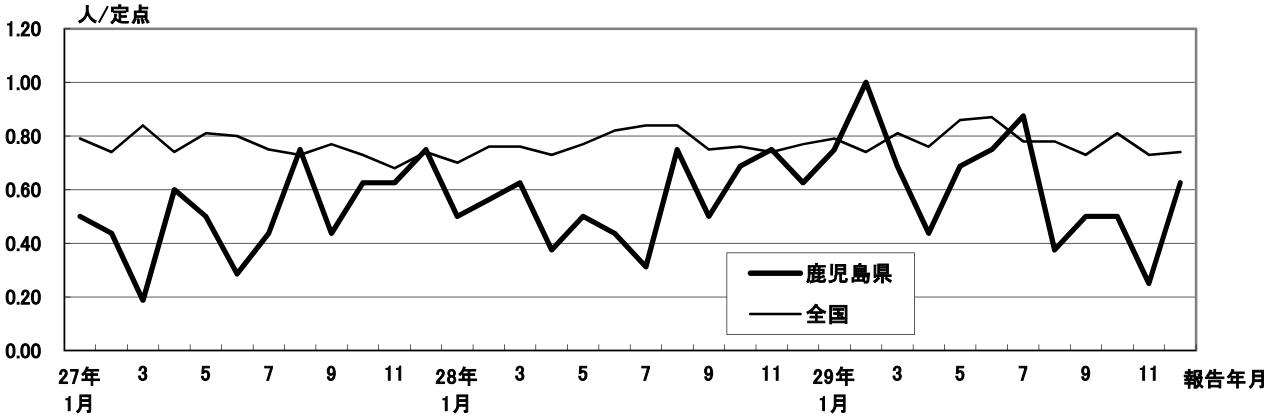

図2-24-2　定点当たり報告数の推移（鹿児島県，全国）

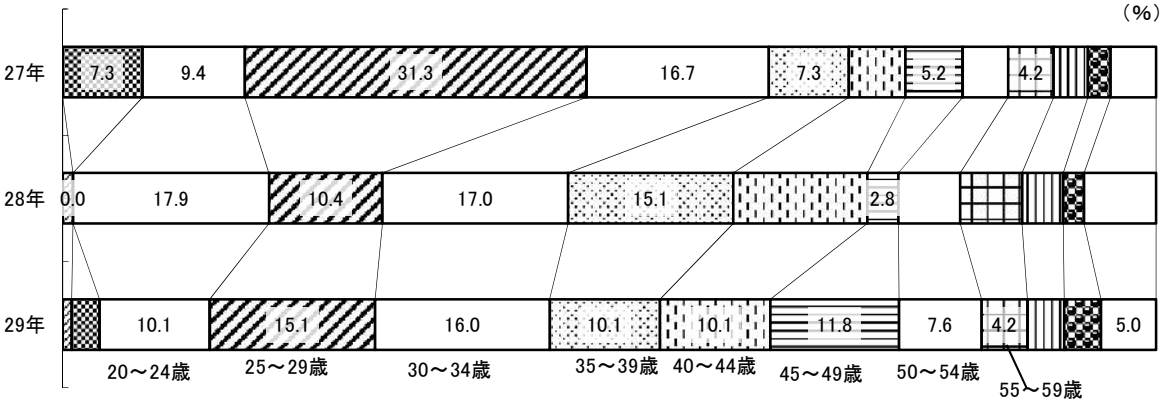

図2-24-3　年齢区分別患者発生状況（鹿児島県）

25)尖圭コンジローマ

（定義）　尖圭コンジローマは，ヒトパピローマウイルス（ヒト乳頭腫ウイルス，HPV）の感染により，性器周辺に生じる腫瘍である。ヒトパピローマウイルスは，80種以上が知られているが，尖圭コンジローマの原因となるのは，主にHPV6型とHPV11型であり，時にHPV16型の感染でも生じる。

平成29年の尖圭コンジローマの報告数は51人（累積定点当たり報告数3.19）で，平成28年（50人）より1人多かった。月別報告数では，1月，2月（それぞれ6人）が最も多かった（図2-25-1）。全国と比較すると，年間を通して少ない状況で推移した（図2-25-2）。年齢別では，25～29歳（21.6%），30～34歳，35～39歳（それぞれ15.7%）の順に多かった（図2-25-3）。

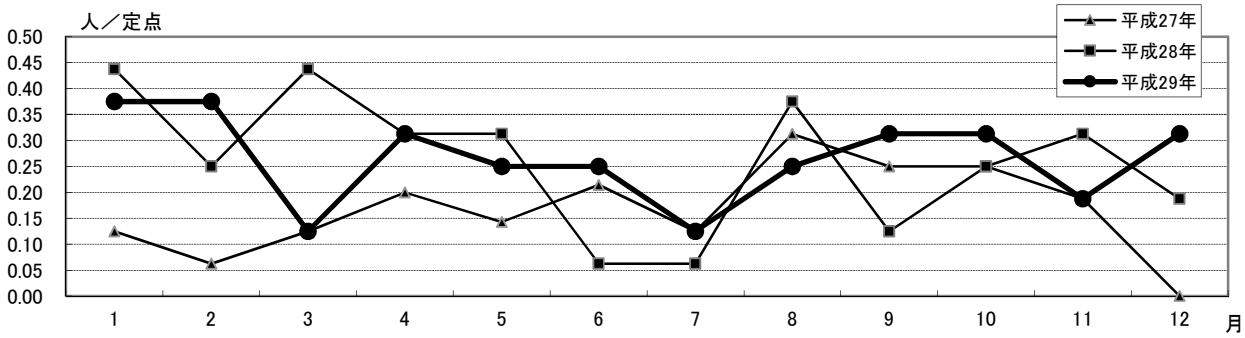

図2-25-1　年次・月別定点当たり報告数の推移（鹿児島県）

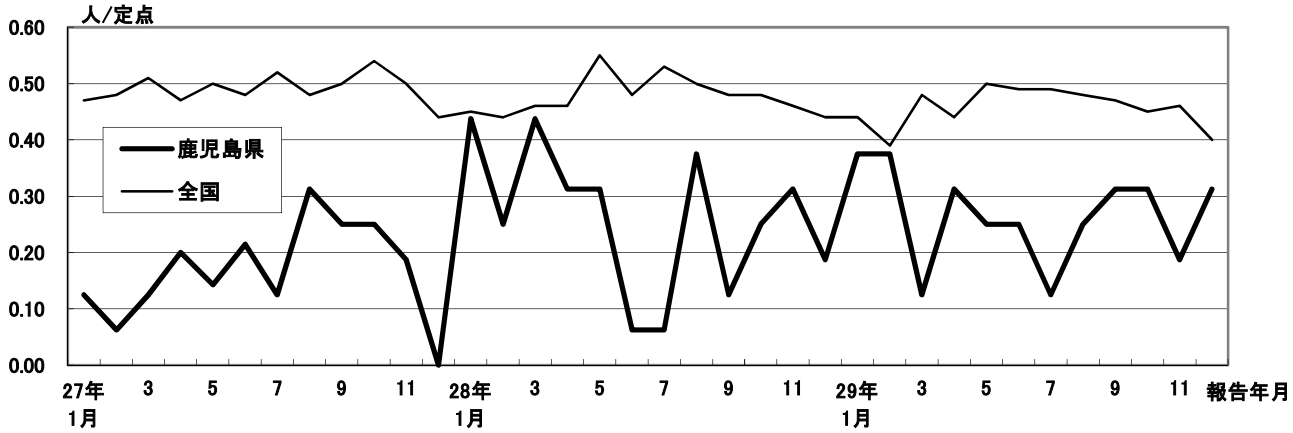

図2-25-2　定点当たり報告数の推移（鹿児島県，全国）

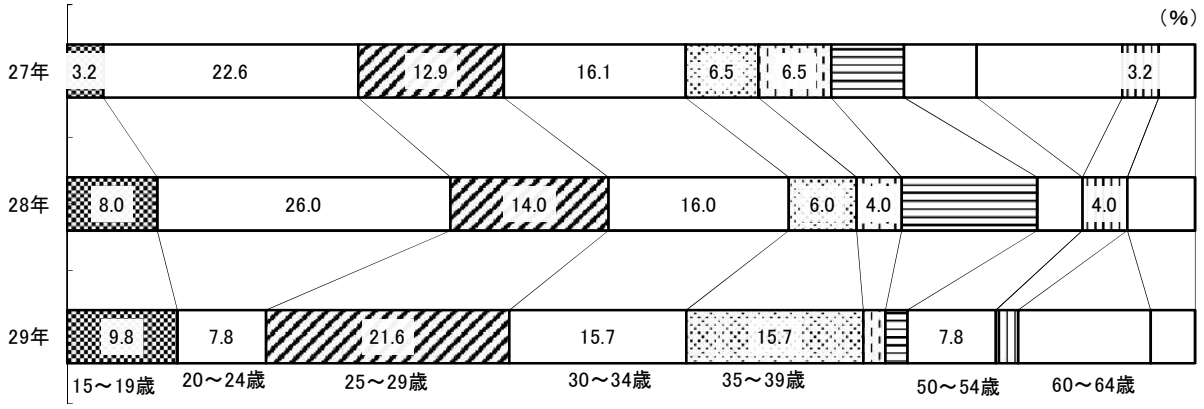

図2-25-3　年齢区分別患者発生状況（鹿児島県）

26)淋菌感染症

（定義）　淋菌（*Neisseria gonorrhoeae*）による性感染症である。

平成29年の淋菌感染症の報告数は273人（累積定点当たり報告数17.06）で，平成28年（202人）より71人多かった。また，月別報告数では，1月（38人）が最も多く（図2-26-1），全国と比較すると，一年を通じて全国を上回った（図2-26-2）。年齢別では，20～24歳（24.9%），25～29歳，30～34歳（それぞれ17.6%）の順に多かった（図2-26-3）。

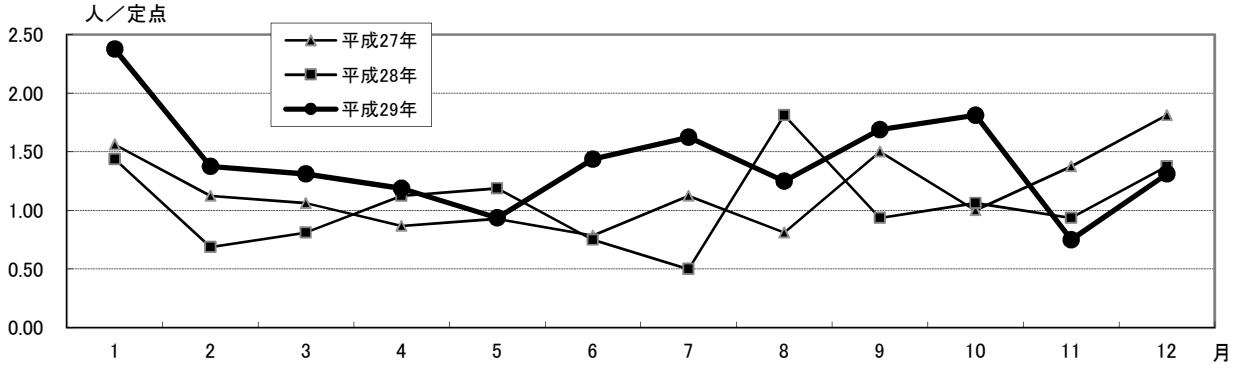

図2-26-1　年次・月別定点当たり報告数の推移（鹿児島県）

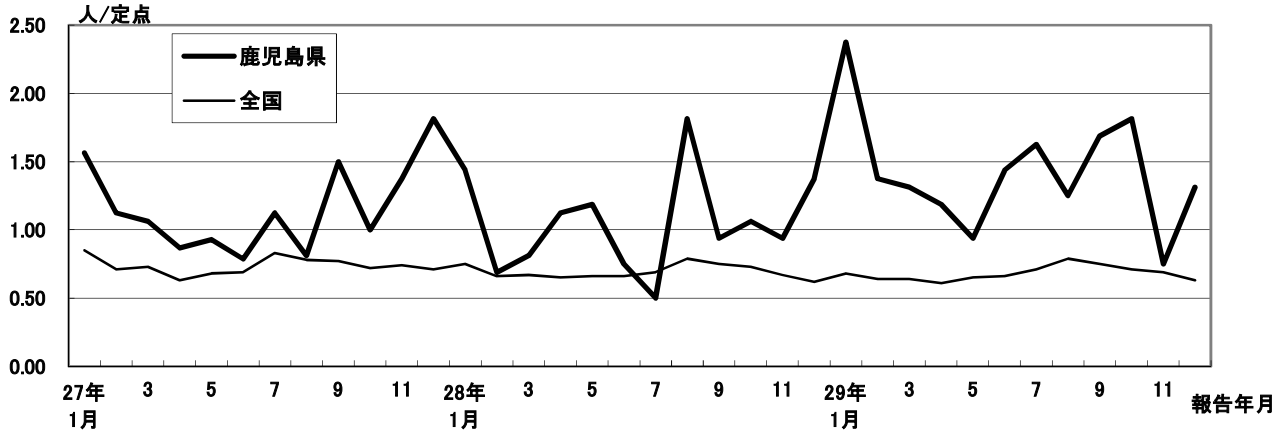

図2-26-2　定点当たり報告数の推移（鹿児島県，全国）

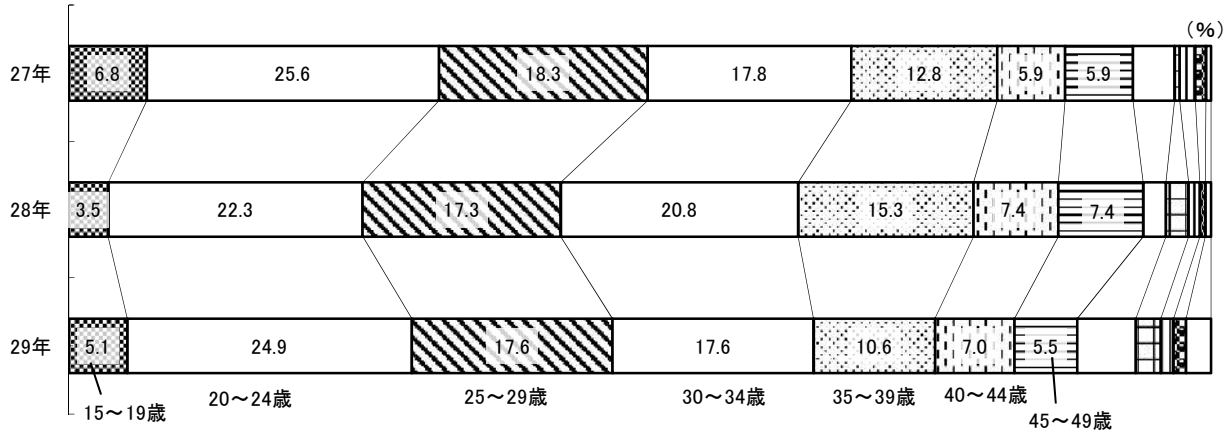

図2-26-3　年齢区分別患者発生状況（鹿児島県）